



花笠づくりの未来を見据えて

スゲ栽培とミニ花笠の商品化で技術継承を

土地課題 失われつつある花笠製作の技術

昭和12年に創業した株式会社尚美堂は、こけしや将棋の置物など、山形県の伝統工芸品や民芸品を中心に、山形市にある複数の店舗で販売しています。中でも、県の代表的な祭りである「山形花笠まつり」に使用する花笠は、(株)尚美堂が毎年納品しており、地域の伝統文化を陰ながら支えています。

花笠は、竹とスゲを素材に作られた「菅笠」を祭りに用いて飾ったもの。竹は軽く丈夫で花笠の枠部分に適しており、スゲは雨を弾くので傘部分に使用されています。しかし近年、菅笠を作ることで職人は減少の一途を辿っています。「花笠は年間約8千個の需要がありますが、高齢化が課題となり編み手は10名足らず。花笠の仕入れは飯豊町中津川生産組合から行っています。その中でも、傘の枠組みを作ることができる職人は1名しかいません。そして熟練の技を持ってしても一日1.5個作

工夫 栽培法と笠編みの技術確立のために

ある尾花沢市にも向かいます。尾花沢市では、「おばなざわ花笠まつり」が開催されており、毎年大勢の人で賑わっています。尾花沢シルバー人材センターでは、市内で使用される花笠だけでも製作したいという思いで「花笠部会」を設け、市内の小学校で使用する枚数分を製作していますが、(株)尚美堂の提案から農業者有志で「尾花沢スゲ生産組合」を発足し、当事業で連携を開始。こうして、尾花沢市でもスゲ栽培が始まりました。(株)尚美堂では兼ねてから、花笠の認知度向上のため、気軽に手に取っていただける土産品として「ミニ花笠」の商品企画をしていました。これを商品化し販売することで、スゲ栽培農家と花笠製作者の収益向上も目指します。

今後の課題・展望 講習や交流で広めたい技術の継承と新文化

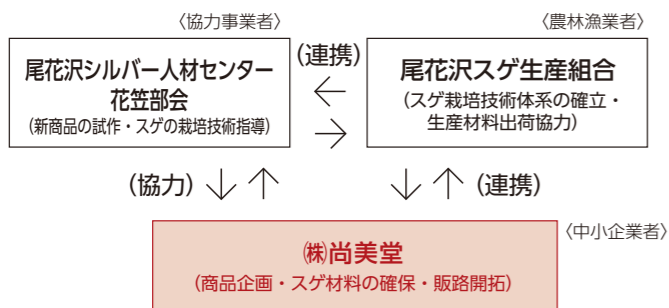
担い手の人材育成のため講習会を開催したところ、編み手の希望者が現れたとのこと。これからも継続的に講習会を実施し、菅笠作りの技術伝承を進めながら、いずれは後継者が現れてほしいというのが逸見さんの願いです。「歴史の土台の上に新しいものを、プロデュースする人がいないと途絶えてしまいます。(株)尚美堂から花笠を広く知ってもらいたく、山形駅の商業施設内にある弊社店舗にて、花笠の関連商品を販売しています」。

また、文化交流のツールとしてミニ花笠を提供し、行政と協力して情報発信もしているという逸見さん。海外のイベントで花笠音頭がBGMとして使われることもあり、音源と花笠をセットにしたPRも考えています。「祭りの価値を主張することも大切ですが、そこには花笠作りの技術伝承が必要不可欠。まずは花笠に興味を持っていただきたいです」。

観光産業のみならず、教育や文化施設とも連携し、花笠について伝えいくとの意気込みを見せてくれました。

事業実施体制

(事業期間 H27.10~H29.9)



株尚美堂の店頭に並ぶ伝統工芸品や民芸品の数々



菅笠ができるまで(1~4)。花笠もミニ花笠も編み方は同じ



会社概要
株式会社 尚美堂
住所 / 〒990-0041 山形市緑町2丁目11-18
電話 / 023-631-1411
ホームページ / http://www.shoubidou.co.jp

店舗DATA
七日町店
山形市七日町2-7-18
(ナナビーンズ内)
023-622-3947

S-PAL(エスバル)店
山形市露町1-1-1
(山形駅ビル S-PAL 2階)
023-628-1232



事業の今これから 令和元年12月現在
現在は、尾花沢市のシルバー人材センターに所属する6名の方によって行われているという花笠。様々な種類が展開され、以前からある笠の縁が青い「尾花沢笠」は、尾花沢市ふるさと納税の返礼品に採用されています。また、装飾の花が青色の「ブルー花笠」も好評で、テーマカラーが青色の地元サッカーチームの選手が山形花笠まつりに参加する際に使用されています。また、「東北絆まつり2019 福島」では、(株)尚美堂として初のミニ花笠作りワークショップを開催。県外の方に多くご参加いただき、400個の花笠が半分でなくなってしまうほどの人気企画だったそうです。花笠への需要は高まっていますが、供給が追いつかないのがまだまだ課題とのこと。

連携の経緯 スゲ栽培の開始と新商品開発への思い

「花笠づくりの前に、スゲを栽培することから始めることにしました」と逸見さん。山形市鈴川地区の若手農業団体と休耕田を利用した栽培を始め、また、花笠踊り発祥の地で

株式会社尚美堂
代表取締役 逸見良昭さん